
暗闇校舎探検隊！

直江 アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇校舎探検隊！

【Zコード】

Z9016F

【作者名】

直江 アキ

【あらすじ】

夜、従兄で教師でもある楓から電話がかかってくる。彼は「校舎に忘れ物をしたから、取りに行くのを付き合つて」とサトコにお願いして 超がつく程の恐がりの楓と強気なサトコの探検は?そして楓の忘れ物とは……

(前書き)

これは『サプライズ』というテーマで書かれたものです。加筆・修正して投稿しました。最後まで読んでいただけると嬉しいです。

「幽靈の正体見たり、枯れ尾花」

少女が腰に手を当てて、床にへたり込む男に囁んで言い含めるよう口を開いた。

「つて言葉知ってる?」

比較的甘めの高音の声。^{ハイトーン・ボイス}ぴたりとしたジーンズが際立たせる足は細い。その下は上履きだ。学生にしては赤茶けた髪で、窓から入る月光に彩られている。

「……知ってるよお」

対して答えた声は情けなさでいっぱいだった。スーツは冴えないベージュ、暗い教室の中で、ぼうっと浮き上がるよつに見える。

「だったらしつかりしてよ、先生なのにだらしない」

「だつてえ……怖いものは怖いってゆうかあ」

「かあ！ これが今時の先生の言葉ですか！？ もひ、そつそとしてよね！ サトコも暇じゃないんだから」

うう、と蹲るような男を睨みつけ、サトコは斜め上を向く。きつちりと整理されたような正方形の枠目の、天井板の一角に不自然な影を見つけて、つとその方向へ歩いて行つた。

「な、なに……？ どうしたの、サトコひやん」

教卓の近く、黒板のすぐ上だ。

力チ、力チ、と規則正しく秒針の動く音が、夜の学校ではやけに大きく聞こえる。時刻は十一時四十五分。あと少しで明日になる。

「……なにい、何なのお……」

あまりにも情けない！

「一柄、一体いくつになつたね?」あのさ、徒奴として言うておくけど、そんなのだから生徒になめられるんだよ」

上の従兄はどの生徒にも分け隔てなく優しく、見た目はそれなりの好青年だが、小さい時から夜と暗闇とおぼなが大の苦手だった。

なんだ、ただの染みか。

怖くない、と言つたら嘘になる。サトコとて怖いものは怖い。大体にしてどこの学校にも七不思議の話はある。ましてや、生徒のいない深夜の学校なんて、しんと静まり返つていて不気味極まりない。

西村楓はその日七時まで学校に残っていた。無論、彼はそれほど熱心な教師ではなかったので、部活や何かその手の、生徒のために休日の学校にいたわけではない。

ただ、家に帰つて酒を飲み、テレビを見て、風呂に入り、ふと思いついたことであつた。

アレービーに置いてきたっけ！？

身の破滅である。生徒に知られたら、見つけられたら、あまつさ

え中身を田にされてしまったなら、彼はもう学校に身の置き所がなくなるだろ。

た。が、時刻はすでに十時を回っている。取りに行くのは恐ろしかつ

かといって、朝の弱い楓が早起きをして生徒の登校時間よりもかなり早くに学校に入り、それを探し出すのは至難の業であることは間違いない。何よりもどこでなくしたかさえ、覚えていないのだ。つまり、自分が帰り際に向かつた先 教室、特別室含めて全てを探して回らなければならない。何故ならば彼は今日、施錠当番だつたのだから。

いやいやいやいや、そんなの無理――

施錠の時でさえ、自分の立てる足音に逐一怯える楓である。それでもまだ校庭では部活終わりの生徒達の声はしていだし、ちらほらと校内にも生徒も残っていたので　彼はその生徒たちを鍵を閉めるから帰りなさいと懇願した　ちらりと恐怖を感じるだけで済んだのに。

彼はそこで頼もしい従妹のことを脳裏に浮かべた。本末転倒であるかとも思ったが、背に腹は換えられなかつた。

従兄にして、我が校の教師でもある、生徒に好かれていた
いうより讃められきつた臆病な楓から携帯電話に着信が入ったのは
十一時少し前だった。

『情けない声は電話口から溢れ出て、しかも相當に狼狽している。
『で、で、でね！　忘れちやつたんだよ！　どこに置いたかも思い出せないんだよ……どこだら、どうしよ、視聴覚室とかだつたら！　あそこ、幽霊が出るつて噂なんだあ！　でも俺、朝は起きられないし、でも今から行くの怖いし！　びしきよ、びしきしたら、ねえ……あの』

カーテンを引くと深く溜息をついた。

電話の向こうでしきりに頭を下げる楓が目に浮かぶようだ。壁の時計を見上げ、日付変わっちゃうかもな、と考えながらサトコはこの従兄の望む台詞を吐いた。

『…………俺、お酒、飲んじゃった…………』「めん
…………わかつたよ、探し物手伝つてあげるから。
楓向かえに来てよ」

この役立たずが！ と心中で盛大に罵倒して、サトコは徒歩で迎えに来るよう指示を出し、電話を切ったのだった。

サトコと楓が学校についたときは十一時半になっていた。

「それで忘れ物つて何？ どんなの？」

校舎は黒々と闇夜にそびえたつていた。何者の侵入も拒むような姿に少しだけサトコも息をのむ。が、隣の楓の怯えようは半端ではない。

「……紙袋」

「中身、なに?」

「えつと……うわっ!」

「どんくさいなあ」

ガシヤンと微かな音を立てる校門を一つの影が乗り越え、ざくざくと校庭を歩く。妙に響く靴音がまた恐怖心を煽るが、サトコが怯えればその分十倍は上乗せで従兄が怯えるだろう。

それだけは「めんだ。」として言つなら、メンドクサイ。

いや、楓の怯える姿は心底楽しいけれど。彼にとつて唯一の救いはこの学校の校庭には「一宮金次郎の銅像」がないってことかも、と蒼白な従兄をちらりと盗み見て思つた。

彼はサトコの服の裾を掴んで離さないうえに、彼女の後ろをひつつくように歩いている。誰かがその後ろからちょっとでも驚かせば、そのまま心臓が止まってしまうんじゃないかという顔だ。

日曜日の深夜の高校で、なんてそうないか。記念になりそう。それに……

サトコはくすりと笑みを齧もたむしたその考へに大いに満足した。

楓、驚かし放題!

心臓が止まらない程度にしておいつといふ分別は持ち合わせていたが、これくらいの仕返しなら許されるだろ?。

いや、決して楓が嫌いなのではない。むしろ楓に頼られるのは嬉しいくらいだ。

サトコにしか見せない、この怯えきつた顔が楽しくて仕方がないのも事実だが、それが自分だけという優越感が根底にあることも薄ら自覚している。

ザクザクと、二人分の足音が真っ直ぐに、誰一人いるはずのない校舎の入口に向かう もちろん職員入口の方だ。

「さあ、鍵開けてよ」

我知らず、囁きのように微かな声が出た。自分ももしかしたら緊張しているのかもしねない。

「う、うん……暗いけど、大丈夫だよね？」

楓は不安そうに頭一つ分背の低いサト「」を見下ろし、鍵穴に差し込んだ鍵を捻る。かちり、と微かな音がして、解錠された。

「でも懐中電灯は使えないよ？」

「え、なんで？」と言いたそうにサト「」を見た従兄に その手にはしっかりと大型の懐中電灯がある 彼女はこれ見よがしに溜息をつく。

「外から光が見えちゃうでしょ？ 中に人がいるのがバレバレじゃない」

「確かにい……」

今夜が満月で良かつた。明かりが多少あるお陰で、ガラス窓付近は比較的明るい。

「とにかく入つて。で、まずは施錠の順番と逆に回らつ？ あとは適當でいいや。まずは どこ？」

「えつと、職員室」

そう聞こえてすぐにサト「は職員玄関の脇の階段を見上げた。このすぐ先、正確には踊り場を一回通るが、この先に職員室がある。が、サト「」は一瞬階段に足をかけることを躊躇した。

真っ暗だ。

階段はまるでどこまでも続くかに見えた。踊り場までわずか十

段程度のはずなのに、真ん中から先は黒く絵の具で塗りつぶしたかのよう。

真後ろで、一ぐり、と息を飲む音がやけに生々しかった。と、同時に楓がきゅっとサトウの手を握る。

「は、離しちゃ嫌だよ……」

それ、むしろ女の子の台詞だよね？ と出かかった言葉を飲み込んで、サトウは勇気を出して職員室に向かつた。

「ひんてんてん」

「ササト、なあん!!」

予想に違わず、楓はかなり怯えてくれた。これがお化け屋敷ならサトコは腹を抱えて笑つていただろう　ある意味楓のなけなしのプライドが守られて良かつたかもしない。

それでも情けないことはこの上ない状態だつたけれど。

職員室では窓辺に掛けられていた物理教師の白衣に驚き、視聴覚室では多分換気のために少しだけ開けてあつた窓から入る風に揺れるカーテンに怯え、音楽室では合唱部が止め忘れた加湿器の湯気に叫び声を上げ　この体たらくである。

楓はしがみつかんばかりにサトコに向つて、小さく震えていた。

サトコもそれらには一瞬ドキリとさせられていたが、すぐに冷静になつて状況を分析している。いや、物理教師の白衣はともかく。

「楓、全然役に立つてないじゃん。施錠当番なのに確認していないの?
窓開いてるし、加湿器点け放しだし この分じゃ普段も満足にこなせてないでしょ?」

「……いや……普段はほかの先生にお願いしてついて来てもらってる」

「情けないなあ」

「うへ……面白い」

そして結局、特別棟には楓の忘れ物はなかつた。

べたべた、と間抜けな音が暗い廊下に一つ。

楓は職員玄関で自分の上履きに履き替えていたし、さつきサトコも昇降口で自分の上履きを履いてきた。靴下一枚だったから、校舎に入つて十五分とはいえ、けつこう冷えた。

窓はあつたが、北向きで月明かりも入らない。その為、廊下は予想以上に暗かつた。びくびくしながら、楓が後ろをついてくる。一階、二階を見て回り、ここが一階の最後の教室だつた。どうやら先ほどまでの会話でサトコがわかつたことといえば、楓が戸締りをするために中まで入つたのはこの教室で終わりらしい。

そして、楓の怯えように呆れたサトコは天井の不可解な染みを見つけたわけで。

「な、何? そこに何かあるのぉ! ?」

「……なんもないよ。はい、立て。次は三階!」

サトコは楓に声をかけ、教室を叩き出した。

暗い階段は目の前だ。そこを登り切り、三階最初の教室のドアを楓から　あまりにももたもたしていてじれったくなつたのでかなり初期で奪つた鍵で開け、一步中に入る。

「　ねえ、教室は全部回つたの？」

サトコは従兄を振り向き、そう聞いた。確信があった。今までの発言からして、彼はきっと。

「四階は回つてません……」

「やつぱり

だつて怖かつたんだ、と情けなく咳く従兄に首を振るしかない。

「……今、俺のこと情けないって思つてるでしょ」

「大丈夫。情けなくないなんて思つたことないから」

漫才のような肯定を返して、サトコは教室内部を観察する。

白い紙袋など影も形もなかつた。月明かりに照らされ、主のいいな深夜の教室は、普段見ている場所なのに全く違う世界に見えた。整然と並んだ机と椅子が逆に禍々しい。

その時、ひつ！　と背後で楓が短く息を飲んだ。

思わずまた何か楓の度肝を抜く物があつたのか、と教室を見回す。並んだ四十人分の机、窓際のヒーター、カーテン越しに差し込む仄暗い月明かり、伸びる影は闇の色だ。ただし、異常はない。後ろのロッカーのあるあの塊はよく見れば脱ぎ散らかしたままの紺色ジャージだった。しいていうならそれだけが黒々としていて異様だが、幽靈に見間違えるようなものではない。

それでも、楓は後ろでがたがたと震えている。

何にそんな怯えてるの？

ぎゅっと締めつけるように握られた手にはもはや血が巡りそうもなく、痛みさえ感じるくらいだ。

サトコはぐるりともう一度だけ見回して、そうしてせつと背後の楓を仰ぎ見た。

「ねえ？ なんもな、い、よ……」

その常態では考えられないほど蒼白な横顔。

歯の根も合わないほど震え、視線はサトコの見ていた教室ではなく、その先の廊下に向けられていた。

な、何！？

サトコの位置から、廊下は見えない。楓を押しのけるようにして廊下を覗く。そしてサトコは同じよう固まつた。

廊下の先に浮かび上がる制服姿。白い手足とカーディガンだけがぽかりと浮いて見える。何かが翻つたことで、それが制服のブリーツスカートだと気付いた。

女生徒だ。

暗闇に浮かぶその顔は、この深夜の校舎には似合わない、笑顔。

ほ、ほ、本物！？

ドサリ、と音がし、腕が下に引っ張られたことと、サトコは情けない従兄が意識を早々に手放したことを見る。こうなると走つても逃げられない。楓を置いて行くなど鬼みたいなこと、たすがのサトコにも出来る筈がない。

女生徒はすぐ近くまで来ている。

喘ぐように息をして、腹をくくつた。逃げられないなら勝つまでよ！の精神で、女生徒に対する。

ぽかりとあいた口に、白い煌めくような歯が見えて 嘔われる！？ とサトコが戦慄いた瞬間、軽やかな声が廊下に響き渡つた。

「あん、もう！ 良かつた！ 心細かつたの……」

「……………はい？」

「閉じ込められて、出られなくて、しかも寒くて、どうしていいかわからなくて」「

「……………は？」

「気がついたら下の電気も全部消えてて、暖房もつかないし、でもいつもなら先生回つてくるのに今日に限つては誰も閉めるつて声かけてくれなくて……あれ、そこで寝てるの楓ちゃん？」

途端にずるずるとサトコは廊下に座り込んだ。ジーンズ越しに冷たい感触がする。

楓ちゃん、といつ呼称は生徒全員に讃められきつた西村楓先生の愛称だ。

自分の生徒じゃないか、ばか！！

未だ自分の手を握つたままの楓の手を 気を失つても離さなかつたのはすごい根性だ 乱暴に払いのけ、複雑な思いでサトコは

女生徒に問い合わせた。

「……つかぬことを伺いますけど、何階にいました?」「え、四階だけど?」

馬鹿が！

心底震んだ目で従兄を見やり、サトコは溜息をつく。

すみません、えと……先輩

上履きの色をそれとなく確かめ
した サトコは立ちあがつた。
足もちゃんとある」とを確認

「楓が今日施錠当番だつたんです。で、怖いからつて言つて四階には行かなかつたんですね。だから原因はこの馬鹿です 跳つていいですよ」

先輩は目を真ん丸に見開き、そして笑った。

なんだ、そういうことだったの！ ひっくりしたのよ、ほんとに
でも、まあいいわ！ 夜中の学校なんて貴重な体験でしょ？」

なかなか豪気な先輩だ。

「あら、いいのよー！ それよりも……お二人の関係は？」

興味津々といったその様子に、なんとなくサトコは彼女が夜の学校でも一人でいられた理由がわかる気がした。

好奇心の一言である。

「 そこでのひてるのは、血縁関係を認めたくない黒鹿な従兄です」
など

目に見えるほどがっかりされて、サトコはどんな答えを期待したんだ、と言いたい気持ちだった。

「へえ、それで回つてたんだ?」

サトコは先輩に向かつて事情を説明しながら、廊下を歩いていた。楓が使い物にならなくなつたことで、彼の位置にはバトンタッチした先輩がいる。

「で、紙袋の中身は何なの?」

「え? と一瞬思つてサトコは余話を思い出す。そう言えば、楓は校門での質問に答えてくれていない。」

「……聞いてないですけど、なんか生徒に見られたら死ぬほど恥ずかしい物、らしいですよ?」

「H日本?」

「……まさか、ねえ」

一瞬、本氣で信じてしまいそうになつてサトコは頭を振つた。

「中身は見つかればわかるわね。で、四階は見てないんだ?」

「そう、そなんですよ! 怖いから施錠しなかつたんですって」「じゃあ、二階のどこにあるわけだ」

楓の言つことが本当ならですけど、とサトコは付け加えた。

「先輩はずつと上に? 怖くなかったですか?」

教室のドアを開け、中を覗き込みながらサトコは背後に質問する。強気を自覚しているサトコでさえ、夜中の学校で一人は嫌だ。

けれど先輩は。

「ん? ……特に怖くはなかつたわ。それに実はちょっと探検してるのよ。わくわくしたかも」

「すごいですね! 楓に爪の垢でも売つてやつてください ん、ないなあ。次行きましょう」

次々と教室を制覇したが、サトコと先輩は何も得るものはなかつ

た。寒さが身にしみただけである。

「…………もういいや。帰りましょ、先輩！」

サトウはついに諦めた。楓が恥かくのもいいかな、とまで思い始めている。

「でも、櫻ちゃん、困るんじゃない？」

「いいですね、おお寝かせて帰らなければいけないから起きあわせますよ」

いや、それはひどいんじゃ、と言いたそうな先輩の視線にサトコは苦笑を返す。

「嘘ですよ。とりあえず、楓を起こしてもう一度回つてみます」
先輩は帰つたほうがいいですよ。家族が心配してると思います」
「うちちは絶対大丈夫よ。とにかく楓ちゃんのところに戻りましょ

廊下を回れ右してサト「と先輩は楓を目指した。

案の定、まだ失神したままの楓を跪いて揺り起こす。

結構乱暴に揺す

「ちよつと起きなさいよ！ 楓つでばー！」

彼はなんだかひどく幸せそうに、ふふっと笑いながら、のびてい
る。先輩は寒い中、しかも閉じ込めた張本人の忘れ物のために一緒
に校舎を回つてくれたというのに。

サトコは楓の忘れ物なんて見つからなくってもいい！ と腹を立てる。

「ちょっとー、楓ー？ サトコもう知らないからね。紙袋、なかつたから帰るよー！」

「……いいえ、あるわ。これでしょ？」
え、と振り仰いだ先輩の手に、いつのまにか握られている白い紙袋。

さつきは……持つてなかつた……の。

ふわりと微笑んだ先輩が、サトコにそれを手渡した。

その中身を見て、サトコは一瞬目を向いた。小ぶりの丁寧に包装された箱に、薄青いサテンのリボンがかけられている。その上に『サトコへ 誕生日おめでとう 楓』と書かれた小さなカードが一枚。

「ハッピーバースデイ！」

「え……あー！」

腕時計の長針はすでに十一時を過ぎている。

「忘れ物見つかって良かったね。じゃあ帰るわ、私」
そう言つたが最後、先輩の姿は霊散霧消する さながら音楽室の加湿器の湯気のようだ。

「う、そ……まさか……」
その先の言葉は出でこない。

「ひ、と呻いて楓が田を覚ましたのはその時だつた。

「あれ、サトコちやん。さつきの、あの、あのおばけ、は？」
意識を取り戻してきょろきょろと周りを探した楓は、サトコの手の中にいる白い紙袋を見て田を見開く。

「それ……俺の忘れ物……」

「ああ、さつきあの先輩からも聞いたの
サトコの誕生日プレゼ

ントだつたんだね、これ

いやあ、あの、その、今何時!?

上げる。少し困ったような笑顔で。

「ハッピーバースデー、サトコちゃん。それ、俺からのプレゼント……恥ずかしくて、生徒に知られるの……俺ってば本当情けない」「うん、まあ知ってるし、それは、楓の唯一の取り柄みたいなものでしょ　プレゼントありがとう」「

「それにしても、あんまり怖くなかったな」

何が、といつ様に小首を傾げる楓に意味深にサトコは口唇を上げる。

「幽靈の正体見たり本物だつた、つてどこね

「えええええー!？」

楓の叫びが深夜の学校に響き渡ったのは
言つまでもない。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。 良ければ感想を……またこうしたお題へなるなどいのじ意見をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9016f/>

暗闇校舎探検隊！

2011年1月31日17時11分発行